

ジェントリフィケーションと住まいの状況と不安 ——西成特区構想と地域変化に対する釜ヶ崎住民の「叫び」——

マー・マシュー

Matthew MARR

Gentrification, Housing Situation, and Uncertainty:

The "Cries" of Kamagasaki Residents about Nishinari Tokku Kousou and Neighborhood Change

アブストラクト：近年の大阪市の釜ヶ崎（西成区のあいりん地区）は、再開発計画や地域の変化が生じており、おそらく日本の現代都市の中でもっとも突出したジェントリフィケーションの実例のひとつと思われる。当該地区を管轄する自治体は、日本の最大の貧困、ホームレスネス、福祉受給、結核が集中した地域を子供連れの家族や観光のための地域に変えることを目指す、西成特区構想という集中的な再開発プロジェクトを実施している。同時に、西成区はボトムアップのまちづくりにおいて、コミュニティの多様かつ反対の意見を取り入れることに熱心に取り組んできた。しかし、町内会、非営利団体、労働組合、政府機関、研究機関などの代表の声が中心となっており、日雇労働者、福祉受給者、公共空間での生活をしている者の声は、このプロセスではほとんどが聞き取られてこなかった。

本稿では、これらの声に焦点をあて、釜ヶ崎住民の住まいの状況の（不）安定が西成特区構想に対する認識にどのような影響を及ぼしているのかを探るため、エスノグラフィーによるフィールドワークを取り上げる。西成特区構想が地域で公然と議論され始めた 2014 年の 8 月と 9 月に行われた、釜ヶ崎に住む 18 人の男性の質的なインタビューのデータを利用する。彼らの幅広い生活史やホームレス状態、福祉受給、雇用、日常生活などの経験の文脈を考察して、インタビューで語った西成特区構想や地域変化に対する見解を分析する。釜ヶ崎における再開発に対する住民の見解が住まいの状況によって異なると主張したい。ホームレス状態（シェルターや公共空間で寝泊まりすること）にある人々は、西成特区構想を現在と将来の生活の安心に対する脅威として経験していることが多い。主に福祉でサポートハウジングのような安定した住まいの状況にある人々は、それに反し、露天商や不法投棄の排除と防犯カメラの増加を日常生活の中での安全性と美化の促進と捉え好意的に見ていた。しかし、行政による福祉や年金の縮小の恐れが彼らの安心感を揺るがしたと言える。

本稿では、彼らがインタビューで表現したこの不安を存在論的安心感 (ontological security) に対する脅威として分析する。存在論的安心感は日常生活、将来、アイデンティティに対するコントロールの主観的感覚である。存在論的安心感は健康、精神健康、社会参加、集団的な効力感を促進する。歴史的に行政の対応が不十分で、一般社会からスティグマがついた地域の再開発では、住民の不安は避けられないものかもしれない。しかし、本稿では、分析を通して住民の地域改善へのさらなる参加を促すいくつかのアプローチを提案したい。これからの社会科学的研究は、様々な住まいの状況におかれている住民に対する再開発の影響を理解するために、多様な方法を用いる必要がある。

はじめに：釜ヶ崎住民の「叫び」に耳を傾ける意味

近年の大阪市の釜ヶ崎¹⁾（西成区のあいりん地区）は、再開発計画や地域の変化が生じており、おそらく日本の現代都市の中でもっとも突出したジェントリフィケーションの実例のひとつと思われる。ジェントリフィケーションとは、労働者階級の地域が中流階級や上流階級の地域に変わることである (Glass 1964)。大阪の計画は橋下徹元市長がその構想を進め、主に西成特区構想(西成特区構想)という正式なプロセスを通じて実施されてきている。この計画によって地方自治体(市と区)が日本の最大の貧困、ホームレスネス、福祉受給、結核が集中した地域である釜ヶ崎を、子供連れの家族や観光のための地域に変えることを目指している (鈴木 2012)。西成

特区構想は、まちづくりという過程でコミュニティの多様かつ反対の意見を取り入れることに熱心に取り組んでいて、様々な支援サービスの強化に努力している (鈴木 2013)。

社会科学的研究では、釜ヶ崎が持つ複数の安全ネットや社会運動、現在の困難、そして、独特なトップダウン再開発とボトムアップまちづくりの組み合わせが、詳しく描かれている (白波瀬 2017、鈴木 2016、原口 2016)。これらの研究では、高齢化、単身世帯、貧困世帯の増加の中、さらには観光、税金、商業を通じて税収を増やすというプレッシャーを受けている日本全国の地域社会にもたらす知見は多い。しかし釜ヶ崎に住む日雇労働者、福祉受給者、公共空間での生活をしている者の近年のジェントリフィケーションについての声は、これらの豊かな記述的・理論的文献ではほとんど聞き取られていない。

* フロリダ国際大学准教授 グローバルと社会文化研究学部 アジア研究プログラム

本稿では、これらの声を前面に出し、トップダウン再開発、ボトムアップまちづくり、排除されやすい住民の主観的経験との関係を検討する。

橋下政権に西成特区構想の担当者として選ばれた経済学者の鈴木亘氏は、主にボトムアップのまちづくり過程が民間や行政の様々な地域のリーダーを集めただけでなく、反対の意見を包摂した「奇跡」について記録を書いている(鈴木2016)。この本は「あいりん型・直接民主主義」と呼ばれる、地域のすべての利権の声を集めた、全住民の声を取り入れる民主的な「アゴラ」を作り出すという、骨の折れるプロセスについて説明している。しかし、地域のリーダーを超えて、日雇労働者、福祉受給者、外で生活している人々が西成特区構想をどのように見ていたかについては、説明されていない。この本ではこれらの住民が、西成特区構想について無知か活動家に騙されているために、「あいりん地域まちづくり検討会議」に「騒動を起こす人」として主に描かれている。彼らの声を包摂するために、大学の先生や学生のボランティアが文盲者に資料を読ませたり、会議の過程をはっきりと説明したり、NPOでシェルターに住んでいる人の意見を聞く場を作ったりする、配慮が払われていたことを強調している。しかし、その声が十分に上げられているとは言い難い。

原口(2016)の著作では基本的に釜ヶ崎の歴史を語っているが、現在の労働者や他の住民が西成特区構想をどのように見ているかを直接説明していない。しかし、漫画喫茶やインターネットカフェで暮らす新世代の脆弱な労働者や関心を持つ読者が、釜ヶ崎から教訓を学べるように、労働者の「叫び」に耳を傾ける努力をしている。また、2000年代初頭までは大阪の公園にテントに住む失業労働者たちの重要な資源であった「流動の自立性」が、再開発のために都市公園の「浄化」に対する反対運動でどのように役立ったかについて原口は説明している。最終的には公園の大規模な再開発のために追い出されたが、彼らの動員により抵抗することができた。疎外化された層が新たな社会運動を形成することができる場所としてのドヤ(簡易宿泊所)街の衰退が想定されており、新しい貧困層は、都市とバーチャルの空間に分散されながら、新しいつながり、サブカルチャー、社会運動を形成せざるを得ないという課題が書かれている。

白波瀬(2017)は、あいりん地区が経済高成長期以来、日本の最も貧しく脆弱な国民のために多層的なセーフティネットを提供していること、そして近年の地域変化がその役割にどのような挑戦を仕掛けて

いるかを説明している。西成特区構想は貧しい住民を排除しようとする計画ではないが、地域の劇的な変化をもたらし、高齢者の貧困層にとって住みにくくなる可能性があるとして述べている。様々な地域社会の団体の代表者、研究者などの「有識者」が西成特区構想のまちづくりのプロセスに初期段階から参加していたことと、福祉受給者、日雇労働者、およびホームレス状態にいる住民の参加が薄かったことを指摘している。彼らは主に行政、旧来の地域商店舗や、正式な計画プロセスに統合された団体の強力なネットワークから除外されている。筆者は、住民の意見を得ようとする場に立ち会ったが、地域の福祉受給者、日雇労働者、あるいはホームレス状態にある人の反応は「概して鈍かった」(p.193)。日雇労働者と福祉受給者の地域の将来への無関心は、彼らの移動度が高い過去、地域の不動産所有権の欠如、およびコミュニティへの結びつきがほとんどないからだとして説明している。

これらの本は、西成特区構想の詳細が公的に議論され始めた2014年の夏に、釜ヶ崎住民との質的インタビューで本稿筆者自身が聞いた「叫び」とは対照的である。上記の文献は、釜ヶ崎住民の複雑な経験、解釈、声を単純化することによって、これらの声を抑制している。本稿では住民が再開発と地域の変化について、複雑な見解を表明したと主張する。さらに、住民の住まいの状況に応じてこれらの見解がどのように異なったかを探る。路上やシェルターなどで暮らす、より不安定な状況にある人々が、福祉でサポートハウジングに住む人々よりも、再開発が地域に残ること自体に脅威を感じているという見解を持つ傾向があった。逆に、より安定した状況に住む人々は、再開発の初期段階でもたらされた地域への美化および安全上の改善について、より肯定的であった。しかし、これらの住民は、西成特区構想や再開発ではなく、地域での生活を続ける安心感や生活保護のおかげだと指摘した。そして、行政による福祉や年金の縮小の恐れが彼らの安心感を揺るがしたと言える。

住民の多様な見方の分析は、住民が貧困と再開発を推進するネットワークからの社会的距離の中で、どのように複雑な見解を形成するかのだけでなく、包括的であると考えられる再開発計画の議論さえも、脆弱な住民の安心感、または「存在論的安心感」(ontological security)を脅かす可能性があることを指摘する。簡単に言えば「存在論的安心感」は現在と将来の生活に対する安心感を示すが、Giddens(1990:92)は、「多くの人間が持つアイデンティティ

の連続性と周囲の社会的および物質的な行動環境の不変性に対する信頼」と定義している。Giddensは、近代社会の揺るぎない社会制度と存在論的安心感の関係を探求しているが、住まいの状況の安定性とこの主観的な安心感の関係を検討している実証的研究は、さらにはホームレスネスや災害は、存在論的安心感を脅かすことを指摘している (Padgett 2007、Hawkins and Mauer 2010、Hsu et al. 2016)。さらに存在論的安心感、健康、精神健康、社会参加、集団的効力感 (collective efficacy) (Sampson 1997) を促進する。本稿はこのアプローチをジェントリフィケーションに適用する。福祉受給者、日雇労働者、ホームレス状態にある人々の視点を中心に、公的・私的再開発の取り組みとしての西成特区構想が、様々な住まいの状況の釜ヶ崎住民の存在論的安心感にどのように影響しているかを検証する。

釜ヶ崎住民のインタビュー調査

2014年5月から9月にかけて、ホームレスネスや支援活動が集中する「サービスハブ」地域での、「人間の安全保障」についての研究プロジェクトの一環として、釜ヶ崎でのエスノグラフィー調査を実施した。主要な公的会議が開催される前だったが、西成特区構想がより公然と議論され始めた頃に、筆者は18人の男性の住民に釜ヶ崎で生活する経験についてインタビューをした。多様な意見を取り入れるために、いくつかのハウジングの形態 (支援付きのサポートティブハウジング、アパート、簡易宿泊所、施設、シェルター、路上) で暮らす人々をインタビューした。確率サンプリングを使用しなかったため、データは統計的な代表性はない。しかし、この様々な住まいの状況にある人からの詳細な質的データは、ジェントリフィケーション、ハウジング、および存在論的安心感の関係を探るために重要である。

釜ヶ崎の三つの支援団体を通じて、インタビューの対象者を募集した。これらの支援団体のスタッフが利用者を紹介したり、直接インタビューをお願いする場所を用意したりしてくれた。3つの団体すべては、代表者が西成特区構想のあいりん地域まちづくり検討会議に参加していたが、スタッフは利用者に西成特区構想を積極的に宣伝も批判もしていなかった。回答者本人に許可をもらった後、団体が用意してくれた部屋で一对一のインタビューをした。質的インタビューだったので、アンケートとは対照的に、事前に決められた回答から選択するのではなく、回答者は自由に意見を話すことができた。インタビューは約1時間続き、回答者の釜ヶ崎に住むよ

うになる過程、日常生活、援助の利用、社会的つながり、不安・安心、将来の計画、地域の変化、西成特区構想という話題を網羅した。

インタビューは、西成特区構想についての不確実性が高い状況で行われたため、多くの場合、インタビュー対象者は噂や地方自治体の長年の不十分、または不平等な対応に反応していた。しかし、すべてのインタビュー対象者は、西成特区構想が若い家族や観光客にとってより魅力的になるように地域を変えることを目的としている、という理解を広く共有していた。この見解は、「中心市街地の社会的に疎外された階級、および労働者階級地域を、中産階級 (そしてエリート) の住居 (および商業) の利用に変換する」として確立された、ジェントリフィケーションの社会学的定義と一致している (Zukin 1987: 129)。本稿の目的は、釜ヶ崎における住民のジェントリフィケーションに対する視点の背後にある精度や合理性には触れず、主観的な解釈や住まいの状況やその存在論的安心感に関する分析である。

釜ヶ崎住民の「叫び」：ジェントリフィケーション、住まいの状況と存在論的安心感

インタビューのデータを分析する時、二つの住まいの状況を考慮した：ホームレス状態 (7人) と安定な住まいの状況 (11人)。前者のグループには、主に外に寝泊まりする人 (3人) と、路上、シェルター、ドヤの間を移動する人が含まれていた (4人)。後者のグループはすべて生活保護を受けており、サポートティブハウジングに住んでいる回答者が7人、アパートが2人、ドヤが1人、そして介護施設が1人含まれていた。

2つのグループの見解には類似点があり、特に目立ったのは政府全体と西成特区構想が持つ有効性に対する不信感である。このような見解は、西成特区構想の計画プロセスに正式に参加するように要請された時、ほぼすべてのコミュニティリーダーに見られた懐疑の姿勢に似ている (鈴木2016)。しかし、表1に示されているように、多くのインタビュー対象者は、西成特区構想と地域の変化について複雑かつ若干相反する見解を示したが、住まいの状況の安定によって明確な違いがあった。ホームレス状態にある釜ヶ崎住民は、地域で生き残る能力に対する脅威として西成特区構想についてはるかに意見が多かった。住まいの状況が安定している住民は、西成特区構想は最も貧しい住民にとって脅威であると見てい

表1. 釜ヶ崎住民の住まいの状況別の
西成特区構想に対する見解

	ホームレス状態 (n=7)	安定な住まいの状況 (n=11)
西成特区構想の様相が脅威	6 (86%)	4 (36%)
西成特区構想の様相に期待	3 (43%)	7 (64%)

たが、対照的に西成特区構想の肯定的な側面についての意見が多かった。

以下では、これらの様々な見解のいくつかの例と、西成特区構想とその地域の変化が、安定や不安定な住まいの状況に住む釜ヶ崎住民の存在論的安心感に、どのように影響したかを説明する。個人の貧困、雇用、支援を受けた経験、地域での日々の生活、将来の計画と希望という幅広い文脈で、これらの見解を提示する。

存在論的安心感への脅威としてのジェントリフィケーション

この章では、西成特区構想がホームレス状態にある釜ヶ崎住民の存在論的安心感に脅威を与えた4つのかたちを検討する。

安定性への脅威

存在論的安心感の基本的要素である安定性 (constancy) は、物質的および社会的環境における安定を指す (Dupuis and Thorns 1998)。西成特区構想が物質的または社会的環境の安定を混乱させると、ほぼすべてのホームレス状態にある回答者が話した。大阪市の予算 (国100%負担) で運営されているシェルターで寝泊まりしていた元日雇い労働者の船橋さん²⁾ は、西成特区構想に対しては非常に懐疑的だった。船橋さんの話によると、2014年に58歳で生活保護を受けている時、福祉事務所のケースワーカーから仕事を探すように指導されたが、いくつかの管理人の面接で落とされた。その後、飲酒のためにケースワーカーに叱られて、福祉が打ち切られた。家賃を支払うことができず、結局アパートから退去させられ、ホームレス状態に戻った。

私はね、今年の1月から切れたから、まあな、3年。3年待っとかなあかん。3年。今、厳しいて。何でかって言うたら、コンピューター。コンピューターの、わしの名前、私の名前しやべったら、一発あるから、(生活保護の再申請が)できません。

船橋さんは、過去の受給歴はデータベースでわかり、福祉事務所がより生活保護の適用に厳しくなっ

たので、3年間は福祉や医療を受給できないと思っていた。彼は路上に閉じ込められ、シェルターや炊き出しに完全に依存していると感じており、西成特区構想は地域の住民の最も貧しく脆弱な住民を傷つけ、排除する目的を持っていると思っていた。

それね、私も不安ですわ。橋下言うたら、3年後で、シェルターと、炊き出し、消す言うから。そんなら暴動起きますよ。橋下な。炊き出しなかったら、はっきり言って、おまえ死ね、いうことやろ。そうやろ。寝るところはええよ、寝るところはええけど、人間はやっぱり食べんとあかんからな。多分、橋下は、暴動起きますと思う。あいつは。年寄りとかおるやんか、生活保護もらうんでも。それをな、勝手な、おまえ、殺すんかい、みたいな。

この意見は、鈴木(2016)が日雇労働者、福祉受給者、ホームレス状態にある人の誤解として説明したものを反映している。噂だけはあったが、シェルターを撤去したり炊き出しを禁止したりする具体的な計画はなく、この執筆時点でも実施されていない。

しかし、さらに重要なことは、船橋さんは地域の変化と西成特区構想を、存在論的安心感に対する脅威として体験していた。西成特区構想が安定性をもたらすのではなく、シェルターの閉鎖と炊き出しの禁止は、路上で生き残る能力への脅威であると考えている。彼の緊張感に溢れた発言と、住民が暴動を起こすという悲観的な見解は、船橋さんにとって西成特区構想が安定性の脅威と感じていることを反映している。

本田さんは71歳で、シェルター、ドヤ、路上で寝泊まりしていた。彼は元グラフィックデザイナーで、年金と「特掃」という高齢者のための公的就労事業による収入をあわせて生活していた。労働福祉センターの建て替えと多くの人々の追い出しを心配していた。

現状ではセンターで郵便の受け取りなんかやってもらって、それを黒板へ書いて知らせるいうふうなシステムになってるんですよ。そういうあれとか、「特掃」のかかわりのあれも全部センターですから、センターは必ず僕も行ってますね、用事なくても。ですから、そのセンターというのがなくなったら、みんな困る人が多いですよ、恐らく。昔、あれなかったんからね、話聞いたら。三十数年前は。そのとき、みんなどこ行ってたんかなと。今やったら寄り場になってますでしょ、仕事がなかったら、そやから、その寄り場の建物がなかったら、

みんなどうなんのかな。

本田さんにとってセンターの建て替えは、本人の人生のさまざまな側面(仕事、年金の引き渡し、社会的な繋がり)を妨げることになるだけでなく、多くの住民が騒動を起こすと認識されている。確かに、安定したハウジングに住む回答者でさえ、センターの建て替えについて心配していた。福祉でアパートに住む70歳の宮城さんは、週に数回友人に会うために自転車でセンターに行くようにしていた。筆者自身にセンターを案内している時に「センターに行けなくなったら、わし部屋でテレビと会話するようになるんちゃう」と孤独を心配して言っていた。

自己決定性と将来を計画する能力への脅威

存在論的安心感のもう一つの重要な要素は、人生に対する自己決定性と将来を計画する能力である(Padgett 2007)。シェルターで寝泊まりしていた65歳の山田さんは、上記インタビューのように、西成特区構想の再開発計画が貧困層をいじめる対策だと見ていた。

あれね、弱い者いじめだと思うよ、俺はね。計画をね。シェルターでも、三徳さんの横に、大きな、いいシェルターを建てるっていうのに、まだ全然、着工もしてないし、何にもしないから。貧困には厳しく、自分たちには甘くって感じが、してるような感じがしますね。将来的には、ここの西成から浮浪者をなくしたいと。自分から好きで浮浪者に、ホームレスになってるわけじゃ、ないんだからね。そういうのは、ある程度は、今まで税金を払ってきて、今まで一生懸命働いてきた人は、ご飯が食べれるような、そういう施設は作ってほしいですね。

西成特区構想が貧困層をいじめる、または地域から浄化しようとしているという疑いは単なる誇張ではない。山田さんは、市予算で運営されているシェルターの新計画で虫にも襲われないで食糧を提供してもらえる、よりよいシェルターが実現していなかったことに対して困惑していた(執筆時点では、新しいシェルターが建てられたが、スタッフによれば、まだ虫が多少いて無料の食事は出されていない)。不安定な住まいの状況の回答者のこれらの極端な主張は、西成特区構想が自分のコントロール外だと感じる程度と自己決定性の欠如を反映している。

多くのホームレス状態にある回答者はストイック

であり、立ち退きや排除に直面した場合に積極的に行動すると述べたが、主に彼らは将来のための具体的に現実的な計画を立てることができていなかった。28年間製鉄業で働いた年金で生活していた山田さんは、再開発計画が実施される前に、釜ヶ崎から逃げると言った。

私はね、そういうことがあるのであれば、着工の時に、この西成から離れます。離れて、自分なりの所、西成よりも、もっと住みやすい所、物価の安い所。私なんか、まだ、年金が少しありますんで、そこで暮らせるような所を、地域ね、安い所で。この西成っちゅうのは、いい部屋でも悪い部屋でも、4万2000円で家賃が統一されてますよね。でも他のところ行ったら、1万8000円とか2万円ぐらいで、家賃があるところが、あるんですよ。日本国の中で一番いい所、物価の安い所。ここで言うと、沖縄。あと、鹿児島、島根。あと、どこかな、三重県。

山田さんは年金の収入があるにもかかわらず、西成特区構想がその地域に残って住むことに対して脅威と見ており、逃げようと思っていた。しかし、彼は福岡出身で、大阪を除いて名古屋にしか住んだことがなかった。彼は去って生き残るだろうと確信していたが、縁がない幾つかの地方に逃げるという曖昧な計画しかなかった。

8年間センターの周りで生活していた59歳の元日雇い労働者の村田さんも、同様に釜ヶ崎から離れることになると言っていたが、将来について曖昧で非現実的な計画しか持っていなかった。

(センターの建て替え)は当たり前や思います。聞いた人が1970年やから、44年目ですよ。人間と言うたら80歳以上ですよ。僕らも出ていきますよ。歩いてでも鹿児島帰るやろうな。金あったら途中まで行くやろうけど。電車賃、ばくちやってね。競艇やったり、勝って。パチンコはせんけど、競艇でね。5万ぐらいできたらばつと帰れんねんけどね。

村田さんは、炊き出しやシェルターを使わずに、地元のNPOが運営している高齢者のための雇用事業を通じた仕事と、アルミ缶などのリサイクルをしながら、厳しい日常生活を生き延びていた。だから彼は何とか自分の故郷に帰ることができると確信していた。しかし、彼は20年以上にわたり家族との連絡がなく、帰ることに対し曖昧な計画しかなかった。その後、パチンコ屋で働いていた時は社会保険に

入っていたので、年金がもらえるかどうかを調べながらタクシー運転手として働く予定があった。しかし、長年の野宿と不安定な住まいの状況によって、運転免許などの資格で仕事につくには、困難である可能性が高いと言わざるを得ない。

日常生活への脅威

日常生活の安定は、人生における意味、コントロールの感覚やアイデンティティを見つけるのにも役立ち、存在論的安心感の中心的な要素でもある(Hawkins and Mauer 2010、Padgett 2007)。村田さんは地域の小中学校の開設や労働センターの建て替えなど、日常生活にどのような影響を与えるのかについても説明した。

そこに、今、中学校いうのができて、それが小学校と合併してるでしょ。あの辺のまわり寝られへんから、もう出ていかなきゃあない。それはもうことし中ね。ことしの12月には。(露店や朝市を使うことがありますか)あります。何でも臨機応変にね。安いから助かります。

村田さんは、寝る場所を変えなければならず、リサイクルや高齢者のための仕事を得たり、社会的な結びつきを作ったり、眠ったり、食べ物を買ったりした場所が失われることに直面していた。人生を自分の条件で生きることと決心し、これらの変化は避けられないと感じたが、現在の日常生活を維持する能力は、西成特区構想と地域の変化によって脅かされていた。

60歳の元日雇い労働者の川上さんは、まだセンターに顔を出しに行っていたにもかかわらず、労働福祉センターが建て替えられることに心配していた。しかし、同じ建物内の診療所がなくなることに関心していた。

あそこしかないからね、自分らが診てもらうのは。救急で倒れたそこの杏林とかね。そこしかないし。普通に昼間に行くんやったら医療センターしかないね。医療保護で。生活保護の人は別よ。役所行ってどこの病院に行きたい言うて、券を発行してくれたらどこでもいけますけど、自分は生活保護ちゃうから行かれへんもん。ここ行きたいとか、あそこ行きたいとか。

上記の船橋さんと同様に、近年厳しくなった就労指導を満たすことができなかつたため、川上さんは生活保護から打ち切られて、再申請が難しいと思っ

ていた。したがって、診療所がなくなった場合、毎日基本的な健康を保つ場所がなくなってしまう。

アイデンティティー構築への脅威

正当なアイデンティティを形成する能力はまた、存在論的安心感の中心的な要素であり、コミュニティ参加を促進することもある(Stuart 2016)。センターの周りで寝泊まりしていた58歳の村田さんは、元日雇い労働者が厳しい環境の中で日本の経済成長のために長年働いたことに対して、市長と西成特区構想の計画者にもっと理解して欲しいと語っていた。

時代の流れやから、(西成特区構想は)そんでいいんちゃいますか。現実にこれ言えるのは、今までの人はみんな働いてた。特別区言うけど、ここ、仕事もせん、今、若い子が入ってきてんねんね。どうやって飯食ってるのか俺らもよう分からんねやけどね。今も現実に体悪い人みんな居ますよ。そやけど、今までおる人は、昭和の時代はみんな仕事しとったんやから、ほんまにね。生活保護にしても、若いとき一生懸命仕事したから、仕方なしに生活保護もらう。

村田さんが、西成特区構想は必然だと言っているが、高齢者の住民のこれまでの社会貢献は認められていないと感じている。この意味で彼にとって西成特区構想は、「労働者」という正当なアイデンティティに対する脅威である。

西成特区構想はまた、ホームレス状態にある人々が経験する一般社会が彼らに対して持つ偏見から生れる「スポイルド(台無しにされた)アイデンティティ」(Snow and Anderson 1993)を強調する。53歳の元工場労働者の滋賀さんは、母親が他界してから極端なうつ病で悩んで、仕事ができなくなった。大阪に流れてきてから貧困ビジネスの犠牲者になって、釜ヶ崎の三角公園に住むようになって炊き出しにお世話になっていた。西成特区構想が高齢者のための特別就労プロジェクトを廃止する恐れがあることに加えて、彼は防犯カメラが差別的だと感じていた。

(防犯カメラは)あまりに人間を卑下しているというか、差別しているとも取れますけどね。取り方によりますけど、あまり俺はよくないとは傾向的に思いますね。直感力で言えば。そんなようけいしてどないするんですか、防犯カメラ。

筆者- カメラがあると安全になると言う人も居る

と思いますけど。

自発的なことを考えてとかそんなんでしょうけど、そやけど差別的な感じも感じるんですよね。ちょっと嫌悪感というか、どうかなというクエスチョンマークですわ。

これは、上記で述べられたような西成特区構想が貧困層をいじめる計画だとする見解と類似している。西成特区構想にコミュニティの正当なグループに属していないと見られていると感じている。これは「台無しにされた」アイデンティティを強化し、正当なアイデンティティを奪って、存在論的安心感を揺るがした。橋下政権は、より厳格な福祉政策を提唱していることから、福祉受給者にスティグマを与えていると感じた安定した住まいの状況の回答者もいた。サポーターハウジングに住んでいた62歳の元ペンキ屋の関根さんは、政治家の福祉受給者に対する差別的な発言や対策を批判していた。

橋下さんは、この生活保護のこと、前に言ったけど、やとったやろ。生活保護はちょっともらいすぎとかあんんで、差別とかなんか言いよったからな。

このように、お金がかかる地域ではなくてお金を生み出す地域に変えるという行政の取り組みのこの側面は、地域での福祉受領というスティグマを強調する。これがまた、正当なアイデンティティを奪って、存在論的安心感を脅かした。

存在論的安心感を促進するジェントリフィケーション？

全体として、より安定した住まいの状況にある回答者は、プロジェクトの側面によって意見は異なっていたが、西成特区構想および地域の変化についてより積極的に発言した。ほぼすべての肯定的なコメントは、地域の美化と安全性の改善に関するものだった。安定した住まいの状況の回答者は、ホームレス状態にある回答者よりも、より強い存在論的安心感のある生活を記述していたが、これは西成特区構想の結果であるというような説明はしていない。これは、上記で述べられた存在論的安心感への脅威が、直接西成特区構想と橋下政権の政策からきたという、ホームレス状態にある回答者の意見とは異なる。さらに、安定した住まいの状況にある回答者の一部にとって、福祉給付や年金へのアクセスを減ら

す可能性について心配していたため、全体的な存在論的安心感はまだ完全ではなかった。そこで、彼らのより広範な生活の中で、西成特区構想やその他の再開発の取り組みが、釜ヶ崎住民の存在論的安心感のさまざまな側面を強化した過程をここで検討する。

安定性への支持

多くの安定した住まいの状況にある回答者は、ホームレス状態の人々が地域から追い出される可能性があるとか心配していたが、大部分は自分自身が追い出される・排除される可能性については話さなかった。美化と安全の向上に関する彼らの肯定的なコメントは、安心や安定性の向上に反映すると言える。サポーターハウジングに住んでいた66歳の川口さんは、地域の変化について肯定的だった。

治安が良くなったですね、昔に比べると。そして町が少しだけだけどきれいくなりましたね。美しくね。昔はもっと汚かったからね。

…僕は露店に関してはいいと思いますよ、なくなったほうが。暴力的なお金取ってたからね、昔は。ビール1本で1万円とかいうお店もあったから、昔はね。そういうお店もあったんですよ。まあ全部じゃないですよ。全部じゃないけどそういうお店も何軒かはあった。そいでその露店がずっと並んでる所の近くに、こう、この辺の人が座ってて、高いとか言うたらその人が来て、いう光景もありましたから。だからなくなったほうがいいですね。あとは例えば飲むほうじゃなくて、CDとか売ってんのもあんまり僕は良くないと思うから。やっぱり正規の店で買うほうがいいと思いますんで。

川口さんは長年寿司屋で働いていたが年を取るうちに、住み込みの仕事が見つからなくなったため、釜ヶ崎のドヤに住むことにした。失業してホームレス状態になりそうになった時に、ドヤの経営者に生活保護の申請を勧められた。交通や買い物に地域が便利で、運動のために歩き回ることもあって、たまに地域のイベントに出席していると言っていた。彼は長い間、同じドヤに住んでいたので、新しく来た人に情報とアドバイスを提供する「先輩」にもなっていた。だからこそ、これらの美化と安全の向上によって、地域に住み続けられるとは直接言わなかったが、地域の改善を積極的に取り入れることは、安心感を助長するものと思えることができる。将来の計画について聞かれた時、彼は現在の部屋でできるだけ長く住む予定だと言っていた。

63歳の元日雇い労働者の大塚さんも、地域の美化や治安の改善を賛成していたが、その様な対策をさらに進めるべきだと思っていた。

だって月末近くになってよ。おじいがかうやってのぞいてるわけよ。そしたら中から出てきて、「お金ないねん」とかって言うやんか。そしたら「ええよ。どうせ入るんでしょ」とか言うて、中へ連れ込むわけ、今は。ついで飲みます。そんな人が多いから、わし居酒屋嫌いなん、大体。行きもせんからね。あれは良くない。ものすごく増えたから余計腹立ってくるわ。ほんで酔っぱらいが多くなって、路上でたむろしたり、寝とったりとからんだりとか、いっぱいおるじゃん。あれが良くない。なんぼあんた特区にしよう言うたかてよ、ああいうの適当にやられたらあかんわの。心底考えてもらわな。わし橋下さんずっと入れてんねんけどね。面白いから。やるのが面白いからな。言ってることもときたまおかしなこと言ってくれる。まあえんちやうか、思うて。

西成特区構想が地域を改善していると大塚さんが感じているという事実は、自身が地域に住み続けられる安心を強めていると見ることができる。彼は地域に長く住むつもりだったが、ドヤからキッチン付きのアパートに転居希望であった。

そして、彼は生活の安定に確信を持っていなかった。

まだ65になってないでしょ。ほったらわしが65になるころに（生活保護の年齢制限が）70になったらどうしようとか考えるわけよ。働ける世代とかいって。今上げようかって言ってるぐらいやからね、年代を。

したがって地域の美化と治安の改善が彼の安定性に対する安心を高めるかもしれないが、彼はまだ地域の貧困ビジネスの問題を意識しており、生活保護からはじかれるという心配が、存在論的安心感を脅かしていると見られる。

自己決定性と将来を計画する能力の支持

将来の計画について質問された時、多くの安定した住まいの状況にある回答者は、現在の釜ヶ崎での生活を続ける予定があると答えた。しかし、西成特区構想や再開発が今後の彼らの計画に左右するものとは、明らかに述べていない。それにもかかわらず地域の美化と安全の向上が、地域の未来と彼らのそこに住み続ける欲求と能力についての安心を強化

したと言える。

それに対し、安定した住まいの状況にあるインタビュー対象者は、将来に対する安心感は西成特区構想ではなく、生活保護のおかげだと言っていた。58歳の元日雇い労働者の加藤さんは、アパートに住みながらアルコール依存症治療を受けていた。センターが完全に廃止されたとしても、他人にとっては問題になるかもしれないが、彼にとっては問題ではないと指摘した。

いや、俺は、福祉受けとるから、他の、生活保護も受けとるから、困らんけど。仕事はある程度上が斡旋しとるからな。それがなくなると困る人が多いと。

加藤さんはよくセンターの周りで将棋や麻雀をしたり、昔の仕事の仲間と会ったりしていた。しかし、彼は依然として生活保護を受けていることを考えると、センターがなくなっても彼に大きな影響を与えとは感じていない。彼は地域の支援団体に、投薬や金銭を管理してもらっていて、毎日顔を出していた。同様に、生活保護だけではなくて、地域の支援団体との繋がりによって、将来に対する安心が高まったという回答者は少なくなかった。

日常生活の支持

将来を計画する側面と同じように、多くの安定した住まいの状況にある回答者は、西成特区構想が大きな脅威にならないと見ており、いつものように日常生活を続けられることに安心感を持っていた。西成特区構想が彼らのこの安心感をどのように左右しているかを直接指摘しなかったが、美化および治安の改善について積極的に話した。

73歳の元工場労働者の吉川さんは、年金と彼が住んでいたサポーターハウジングでのアルバイトで生活していた。露店の撤去について次のように語った。

学校あるでしょ。その裏からずっと飲み屋いうかね、小学校の裏でね。そういうのずっとありましたけど、それがもう完全になくなって、撤去されたよね。でもそれはええと思いますわね。

吉川さんは2007年に65歳で退職して、安く生活ができると聞いたので釜ヶ崎に住むようになった。買い物や家賃の安さの面で、この地域がとても住みやすいと言っていた。

例えば食事にしてもね、作ったあれやとか、そこらにあちこちありますからね。ちょっと西成いうの、食事にしても。他行ったら、そんなないですけどね、街やったら。おかずにしろ、そういうのはみんなもう作ったやつが売ってるでしょ。みんな行ってますからね。確かに安いです。

高血圧や風邪の時に、歩いて行ける距離に診療所があるのが便利だとも指摘した。この様に、吉川さんは日々の生活を続けることができると確信していた。しかし、吉川さんは、地域を再開発する計画が、福祉受給者に悪影響を及ぼす可能性があるとも感じていた。彼は政治家を信用せず、年金について心配していた。

また政治のことはもちろん、ああ言うたなぐらいで。例えばそういう福祉のあれも、なんか切るとか、なんか怪しいこと言うてましたからね。早く福祉のほうの金額というか、そういうの下げるとか、なんか特に西成が追い出して、福祉を受けてるね。多いから、どうのこうのっていうのはちょっと聞いたことはありますけどね。橋下かなんか話してるの見たことが。

そんな、僕は別に福祉受けてへんから。福祉受けてたらまたね、あれやけど。年金もどうなるか分からんけど。今のところあれですわ。

このように、最近の政府の行動によってもたらされた改善が、吉川さんの将来の不確実性を完全に払拭するわけではないことがうかがい知れる。

84歳の元鉄道会社従業員の多田さんは、80年代初めまで飯場とホームレス状態の繰り返しをしていたが、ここ数年、サポーターティブハウジングで生活していた。サポーターティブハウジングのスタッフは自分の家族だと思っていた。全体に、彼は非常に安定した快適な日常生活を送っていると説明していた。

ここはもう生活の場所やから、出るに出られない。ここを出たらまた野宿せなあかんから。そういう感覚やから。別に他に・・・苦しくても守らなきゃ。また苦しいことないですわ。

ここから出ようと思ったことはない。極楽だ。心配事がないもん。カラオケは歌えるし、月末になればお金は入るし。医者にも、ちゃんと向こうが診察してくれるから、だいたい糖尿病もようになったよとかね。医者が全部薬を調合してくれるからね。あそこが悪いで医者行ったら、そんな。薬がなくなったから来た言うて。体に合うような薬作っ

て。それで血の検査したら、糖尿病がだいぶようなってるね。

多田さんも地域の衛生面の改善について肯定的だった。これは、彼の日常生活の安定に対する自信を強めていると言える。

アイデンティティ構築の支持

回答者は「釜ヶ崎住民」として、また西成特区構想の支持者としてのアイデンティティについて熱心に話さなかったが、プロジェクトの側面、特に美化・治安の改善が、正当なアイデンティティ構築を促す可能性がある。西成区で生まれ育った元パチンコ屋店員の伊藤さん(78歳)は、仕事を失い、ホームレス状態に陥ったところで釜ヶ崎に来た。福祉事務所を訪れ、潰瘍や脚の怪我で入院した。その後、サポーターティブハウジングに入居した。

そや。もう13年以上やからね。13、そや、もう13年超えたんやね。ただ、ここで、気楽やわね。早い話が。ほんまに気楽や。

確かに町はきれいになってくる。それに、皆、務めてんのやけどね。年々、まあ、それ、きれいになっていってるけど、中には悪い人間居るわね。よう落書きしるとか居るわな。今ならまだ居るんかなあと。そういうのはなくしてやな、ほんまにきれいにしてるの、あるわな。私もこの10年たったら、ちゃうと思うねん。私もここへ来たとき、20年ぐらいかかるなあと思っったも。きれいに。西成署とかね。

彼は、釜ヶ崎の住民としてのアイデンティティを明確にしなかったが、地域については積極的に話した。したがって、西成特区構想の初期の取り組みでもたらされた改善は、釜ヶ崎が正当なコミュニティだという意識を高めることが可能である。

しかし、橋下政権が交通機関の利用のために、福祉受給者が支払う金額を変更することによって、コストを削減しようとする対策については、不安を抱いていた。

あれは大阪市長が、あれ、橋下いうんか。皆怒ってるもな。年寄りいじめる言うて。いや、年寄りいじめるのはかまへん。子どもさんをとかあんなのをな、大事にしたらええのや。われわれはもう先短いから、俺、言うんや。年寄り、皆、ぼやいとるわ。

伊藤さんは、脆弱な人々の「いじめ」という批判にもかかわらず、地域の清掃活動に参加したいという希望を述べた。これは、彼がコミュニティを大切にしており、メンバーとして貢献することの必要性を感じていることを示している。

生活保護や地域の団体からの支援を受けた人は、恩返ししたいと答えたものが少なかった。まだホームレス状態にある64歳の田中さんが、「特掃」と呼ばれるNPOが経営している高齢者の就労プログラムに参加する事によって、直接得をするだけでなく、地域の改善に参加しているとの意味を意識していた。

この特掃就いたおかげで、無料で健康診断も受けられるし、レントゲン検査もできるように。助かってますわ。今の特掃いう制度ううか。仕事は割と楽でしょ。そういうメリットはありますわね。

考えてみたら、町がやっぱり美化って、きれいになりますわね。掃除とゴミを取るいうことはね。ここらはどっちかいうたら無法地帯ですから、行政もあんまり力入れなかった所ですわ。それを特掃ううか、NPOのおかげで力入れて、これではあかんと思って美化に協力する意味もあって立ち上がったと思いますけど、それ考えたら、やっぱりきれいになりますわね。おたくさんも、センターの中歩いてみたらよう分かります。ゴミ、無法地帯みたいに散らばるでしょ。あれを毎日きれいに掃除したり、週に1回の割で水洗いなんかもしますから、まだ汚い割にはきれいになっています。だから、町の美化に協力しとると思います。個人的にも、生活の一部として、賃金ももらえるし、助かっています。

ホームレス状態から抜け出すために、仕事の日数を増やして欲しがっていたが、田中さんにとっての地域美化に参加する意味は、正当なコミュニティのメンバーの意識と同時に、存在論的安心感を高める助けとなる可能性がある。

結論

上記の分析は、釜ヶ崎の歴史、複層的な社会的セーフティネットとしてのダイナミックな役割、そして進行中の課題と機会に関する最近の書籍の基礎を基にしている(白波瀬 2017、鈴木 2016、原口 2016)。しかし、ジェントリフィケーションの様々な効果を正しく理解するために、住民の経験や意見を検討

する必要がある(Saracino-Brown 2017、Slater 2006)。具体的に本稿では、現在の釜ヶ崎住民の「叫び」に注目を当てることによって、地域の様々な団体のリーダーや有識者だけでなく、再開発に一番影響を受ける人々の複雑な意見が見えてきた。本稿で述べた包括的なものまで含め、貧困地域の再開発プロジェクトは、不安定な住まいの状態にある住人の存在論的安心感への脅威をもたらす可能性があることを明らかにできたことが、今後のジェントリフィケーション研究に貢献できる点となっている。ジェントリフィケーションの影響に関する広範な文献は、直接的な排除や立ち退きに焦点を当てている(Wyly et al. 2010、Freeman 2011)。住民が、ジェントリフィケーションをどのように経験しているかを検討しているが(Lloyd 2006、Patillo 2007)、存在論的安心感の観点から検討するものは、本稿が初めてである。

また、本研究結果は、安定した住まいの状況と存在論的安心感の関係に関する実証的な研究となっており、自然災害やホームレスネスと同様に、ジェントリフィケーションは存在論的安心感を脅威に晒す傾向があることがわかった(Dupuis and Thorns 1998、Hawkins and Mauer 2010、Padgett 2007)。安定した住まいの状況にある回答者と、ホームレス状態にある回答者の見解の違いは、安定した住まいの状況が存在論的安心感の中心的条件であることを示しており、これらの研究をさらに支持している。存在論的安心感は、精神的健康、身体的健康、社会的統合、そして集団的な効力感の意識にさえ影響を及ぼすので、特に重要な要因なのである。

実践的なインプリケーションとしては、地方政府がボトムアップのプロセスに包括的に取り組んでいるとしても、西成特区構想の脅威としての否定的認識は、住民、特に不安定な住まいの状況にある住民に、地域に住み続けることに対して再確認が要請されるということである。多くのインタビュー回答者は、過去の地域に対する行政の無関心や、橋下政権による福祉に関するコスト削減を否定的に経験し、西成特区構想を当初から信用していなかった。従って、これまでの行政の不十分な対応を解決し、すべてのコミュニティーメンバーに弱者が強制退去されないという、具体的な保障を明示することが重要である。大阪市役所と西成区がこれまでの不十分な対応に対しての正式な謝罪と弱者を排除しないことを約束して、ボトムアップ方式で西成特区構想を始めた(鈴木 2016)。これは、行政と再開発者によって動かされる欧米のトップ・ダウン・モデルと対照的である(Halle and Tiso 2014)。しかし、残念なこと

に、上記の分析は、深刻な不平等と長年の行政への対立感を有しているケースでは、完全に歴史と疑惑の克服ができない場合があることを示唆している。

地域での清掃と安全の向上という西成特区構想の積極的な認識は、疎外されたコミュニティの安全や地域環境の認識に関する研究成果に合致している(Hsu et al.2016)。より清潔な地域は、一般的に安全の認識を向上させ、これは、存在論的安心感、健康、社会参加、および集団的な効力感などの様々な結果に積極的に影響を及ぼし得る。さらに、コミュニティに恩返ししたいという回答者の要望は、住民がこれらの地域改善活動に参加する機会を広げること示唆している。これはまた、コミュニティとのアイデンティティを強化し、存在論的安心感をさらに強化することができる。

主に建設業で労働してきた釜ヶ崎住民の一般社会への貢献が、西成特区構想に認められるべきであると感じた回答者も少なくなかった。近年、美化プロジェクトであるNishinari WAN (Wall Art Network)が、釜ヶ崎近辺に巨大なヒップホップスタイルの壁画を生み出している。「自分の街は自分で作る」とか、「あせらず・くさらず・あきらめず」などのようなポジティブメッセージはあるが、釜ヶ崎の労働者のアイデンティティを反映する壁画がない。住民の社会貢献を認めている壁画は、誇りを持ち、住民のために正当なアイデンティティ構築を支援する方法の一つになるかもしれない。

住民の声を再開発プロジェクトに組み込むことは、鈴木(2016)が名付けた「あいりん型・直接民主主義」のためには不可欠である。この執筆時点では、西成特区構想の計画プロセスに携わっている研究者が、地域の500人の住人を対象に大規模な調査を行っている。この調査は貴重な参考になるだろうが、上記の分析は計画の初期段階で、住民自身の様々な視点を抽出するエスノグラフィック研究アプローチを使用すべきであることを示唆している。上述の調査は、住民のアイデアを計画プロセスに取り入れる、より誘導的な方法である一方で、質的研究はプロジェクトに関するコミュニケーションを改善し、計画への信頼を高め、脆弱な住民の存在論的安心感に対する脅威を防止する方法の一つかもしれない。

さらに質的研究は、ジェントリフィケーションが住民にどのように影響しているかを調べることによって、社会ネットワーク、従来の地域住民と新住民の間の紛争、商業や他の地域機関の変化に関する見解、主観的な排除などについて、政策に影響を与

えることが可能である。おそらく最も重要なのは、さまざまな方法論やデータを使用した研究によって、低家賃の住宅のストックの変更を含む、釜ヶ崎からの物理的な立ち退きを記録することである。日本全国の孤独な高齢者や貧困世帯の増加や、若い家族や観光からの資源を増やす圧力下にあるたぐさんのコミュニティが、釜ヶ崎から学ぶためには、ジェントリフィケーションの実証的な「カオス」(Rose 1984)のさまざまな側面を探索することが重要である。

注

- 1) 釜ヶ崎は西成区北部にある萩之茶屋1-3丁目、太子1-2丁目、花園北の大部分を示す不正式な地名である。戦前までは正式に使われていたがそれ以降は地域の用語で残った。60年代から行政対策では「あいりん地区」と呼ばれるようになったが現在マスメディアではあいりん地区と釜ヶ崎を両方使う傾向がある。行政機関があいりん地区で民間の団体が釜ヶ崎を使う傾向がある(白波瀬2017)。本研究で住民が使った地名も一致していなかったがあいりん地区より釜ヶ崎を使う傾向が若干強かったのでここで釜ヶ崎を使うことにしている。
- 2) 本稿で使用されるインタビュー回答者のすべての名前は仮名である。

日本語参考文献

- 白波瀬達也(2017) 貧困と地域：あいりん地区から見る高齢化と孤立死 中公新書
- 鈴木亘(2016) 経済学者日本の最貧困地域に挑む あいりん改革3年8ヶ月の全記録 東洋経済新報社
- 鈴木亘(編)(2013) 脱・貧困のまちづくり「西成特区構想」の挑戦 明石書店
- 鈴木亘(2012) 西成特区構想有識者座談会報告書 西成区役所 <http://www.city.osaka.lg.jp/nishinari/page/0000187570.html>
- 原口剛(2016) 叫びの都市：寄せば、釜ヶ崎、流動的下層労働者 洛北出版

英語参考文献

- Brown-Saracino, Japonica 2017. "Explicating Divided Approaches to Gentrification and Growing Income Inequality," *Annual Review of Sociology* 43:515-539.
- Dupuis, Ann and David C. Thorns 1998. "Home, home ownership and the search for ontological security," *Sociological Perspectives* 46(1):24-47.
- Freeman, Lance 2011. *There Goes the Hood: Views of Gentrification from the Ground Up*. Philadelphia: Temple University Press.
- Giddens, Anthony 1990. *Consequences of Modernity*. Oxford: Polity

- Press.
- Glass, Ruth L. 1964. *London: Aspects of Change*. London: MacGibbon & Kee
- Halle, David and Elisabeth Tiso 2014. *New York's New Edge: Contemporary Art, the High Line, and Urban Megaprojects on the Far West Side*. Chicago: University of Chicago Press.
- Hawkins, Robert L. and Katherine Mauer 2010. "You fix my community, you have fixed my life: the disruption and rebuilding of ontological security in New Orleans," *Disasters* 35(1):143-159.
- Hsu, Hsun-Ta, James David Simon, Benjamin F. Henwood, Suzanne L. Wenzel, Julie Couture 2016. "Location, location, location: Perceptions of Safety and Security Among Formerly Homeless Persons Transitioned to Permanent Supportive Housing," *Journal of the Society for Social Work and Research* 7(1):65-88.
- Lloyd, Richard 2006. *Neo-Bohemia*. London: Routledge.
- Padgett, Deborah K. 2007. "There's no place like (a) home: Ontological security among persons with serious mental illness in the United States," *Social Science & Medicine* 64:1925-1936.
- Patillo, Mary 2007. *Black on the Block: The Politics of Race and Class in the City*. Chicago: University of Chicago Press.
- Rose, D 1984. "Rethinking gentrification: beyond the uneven development of Marxist urban theory." *Environment and Planning D. Society and Space* 1:47-74.
- Sampson, Robert J. 1997. Neighborhoods and violent crime: A multilevel study of collective efficacy. *Science* 277:918-924.
- Slater, Tom 2006. "The eviction of critical perspectives from gentrification research," *International Journal of Urban and Regional Research* 30(4):737-757.
- Snow, David and Leon Anderson 1993. *Down on their Luck: A Study of Homeless Street People*. Berkeley: University of California Press.
- Stuart, Forrest 2016. *Down, Out, and Under Arrest*. Chicago: University of Chicago Press.
- Zukin, Sharon 1987. "Gentrification: culture and capital in the urban core." *Annual Review of Sociology* 13:129-147.